

30代女性誌から読み解く  
働く女性像の変化  
～『Domani』『VERY』の事例から～

政治経済学部  
高橋恭子ゼミ  
鈴木日向

「女性が働くこと」——今では当たり前のようにも感じるが、その歴史はまだ浅い。かつては社会で「働く」ことは男性の役目であり、女性は主婦として家事・育児に専念することが「普通」だった。男女雇用機会均等法の制定や不況など様々な要因によって共働き世帯が増加しており、時代が進むにつれて女性が働くことが以前よりも自然と受け入れられる社会に変わってきている。

しかし、その一方で依然として女性が働くことには多くの障害が立ちふさがっている。女性は男性と異なり、妊娠・出産という選択肢がある。これら女性特有のライフステージでは、どうしても仕事から離れなくてはいけなかったり、周囲の理解が得られなかったりする。

こういった背景のなか、「女性が働くこと」の価値観はどのように変化しているのだろうか。不況から徐々に景気を回復させていこうという社会の流れの中で、どのように女性が活躍しているのか。

本論文では、橋本の「女性誌にみられる『働くこと』の意味づけの変容」を先行研究として、2000年代以降の30代向けの女性誌から働く女性を婚姻状況等から分類し、女性が働くことが20年間でどのように変化したか分析する。そのうえで、橋本が提示した「働くことの意味づけ三極化」がどのように変容したのかを現代と比較・検討しつつ考察したい。